



Title	今古文經學に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	吉田, 勉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14571号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81443
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tsutomu_Yoshida_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 吉 田 勉

主査 教 授 弮 和 順
審査委員 副査 教 授 近 藤 浩 之
副査 特任教授 池 田 証 壽

学位論文題名
今古文經學に関する研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、中國清末における今文經學を中心に据えて、今文學の發展史、今古文經學の相違點、ならびに具體的な經書解釋のあり方の考究を目的としたものであり、清代の今文學者が論じた「微言大義」という語に着目しつつ、皮錫瑞（1850～1908）の説・宋翔鳳（1777～1860）の説への考察、さらには、廖平（1852～1932）の『穀梁古義疏』への考察を通して、當時の今古文經學史觀の解明を圖った研究である。同論文の評価できる点として、以下の四點を挙げることができる。

第一に、皮錫瑞の「微言大義」説に関して、その主著『經學通論』のみならず、近年公表された日記等への考察をも通して、同説が湖南省長沙における梁啓超との交流や葉德輝との論難を通じて形成されたこと、また、今文學者が廣く群經に「微言大義」の存在を主張したことを確認した上で、皮錫瑞もその系譜上に位置づけられること、さらには、皮錫瑞の説が群經の中でも特に『春秋』を對象としたものであることを實證的に明らかにした點。

第二に、宋翔鳳の「微言」説について、その著書『論語說義』への考察を通して、「微言」に対する定義を整理した上で、それが考證學者の惠棟や錢大昕の説に基づいていることを明らかにするとともに、宋翔鳳は考證學者たちの萌芽的な「微言」説を今文學の體系中にとりこみ、それ以後の今文學派における「微言大義」説に發展の契機を與えたことを論證した點。

第三に、廖平の今古學に関して、その著作『今古學考』および『穀梁古義疏』への考察を通して、廖平は、今學の禮制とは孔子が晩年に定めたものであり、それは『禮記』王制篇に遺されるとした上で、群經中の禮制のうち『穀梁傳』の禮制が最もそれに合致することに基づいて、同書は孔子晩年の理想を伝えるものとして高く評價したこと、同時に、この評價は『穀梁傳』の成立・傳承に對する『穀梁古義疏』中の説とも關わり、廖平の『穀梁傳』觀の基礎を成していることを證明した點。

第四に、廖平の『穀梁古義疏』に見える『穀梁傳』解釋への詳細な考究を通して、廖平は、王制篇と『穀梁傳』の禮制とが合致するという自説に依據しつつ、舊注を批判するとともに、その自説やそれを應用した傳文解釋を補足して立證するために劉向説を引用したことについて、具體的事例を提示しながら、解明した點。

なお、本論文第一章の趣旨は「皮錫瑞の微言大義説について」と題して、日本中國學會第七十二回大會（2020年10月11日）において口頭發表されたものである。また、第二章は「宋翔鳳『論語說義』の微言説」と題して『中國哲學』第47號（北海道大學中國哲學會、2019年）に掲載済、第三章は「廖平の今古學と『春秋穀梁傳』」と題して『日本中國學會報』第70集（日本中國學會、2018

年)に掲載済、第四章は「廖平の『穀梁傳』解釋—その舊注批判と劉向説の引用をめぐって—」と題して『中國哲學』第45・46合併號(北海道中國哲學會、2018年)に掲載済である。いずれの論考も査讀を経たものであり、すでに一定の評価を得ていることが知られる。中でも特筆すべきは、第三章の論考は、2019年度日本中國學會賞(哲學・思想部門)の受賞論文に他ならず、きわめて高い水準にあることがうかがわれる。

最後に、審査を通じて、各章におけるそれぞれの論旨は實に明快であり、行論も理路整然としているが、各章における個々の考察内容と全體の論文名との間にいささか乖離が見られるのではないかとの指摘があった。しかし、申請者は、すでにこの點を自覺しており、また今後、研究を進める中で、論文名に相應しい論考の進展が期待されることから、本論文の意義を損なうものとはいえない。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果に基づき、本審査委員會は、全員一致して本論文が博士(文学)の學位を授与するに相應しいものであるとの結論に達した。